

Rgveda VI 61

—— Sarasvatī 讃歌 ——

山 田 智 輝

Sarasvatī はリグヴェーダ (Rgveda, 以下 RV) に 3 篇の単独の讃歌 (VI 61, VII 95 及び 96¹⁾) を有し、数ある河川の中でも特別な存在として位置付けられている。Sarasvatī 川は現在既に大部分が涸渇しており、Ghaggar 川, Hakra 川にその痕跡を留めるのみであるが、RV では山岳地帯を流れて海へと注ぐ大河として描かれる。またブラーフマナ諸文献にはその河岸部の遡上を模倣した sattrā 祭の一バリエーション²⁾ が伝承されており、祭式とも深く関連付けられていた。本稿では、RV VI 61 のテキストと翻訳を提示し、その中の特筆すべき事項について文末脚注で解説を加え、Sarasvatī を巡る様々な情報を検証する。当讃歌は、Sarasvatī の荒々しく流れる急流としての姿 (2, 7, 8), インド・アーリア人のインド亜大陸西北地方から東方への移動の軌跡 (9) やその過程での先住民との遭遇・闘争の様子 (1, 2, 3, 13), さらに Sarasvatī 河岸部での定住の宣言 (14) など、数々の興味深い情報を記録している。なおページの制約上本稿で述べられなかった諸点は別に発表する。

RV VI 61³⁾ 1. *iyám adadād rabhasám ṛṇacyútaṃ | divodāsaṃ vadhr, yaśvāya dāśúṣe | yā śāśvantam ācakhādāvasam pañim | tā te dātrāṇi taviṣā sarasvati* || 2. *iyám śūśmebhir bisakhā ivārujat | sānu girīṇām taviṣébhir ūrmībhiḥ | pārāvataghnīm āvase suvṛktībhiḥ | sárasvatīm ā vivāsema dhītībhiḥ* || 3. *sárasvati devanīdo ní barhaya | prajāṃ víśvasya bṛṣayasya māyīnaḥ | utá kṣitībhyo 'vānīr avindo | viśám ebhyo asravo vājinīvati* || 4. *prá ṇo devī sárasvatī | vājebhir vājinīvati | dhīnām avitr, y ávatu* || 5. *yás tvā devi sarasvat, y upabrūtē dhāne hité | indram ná vṛtrātūr, ye* || 6. *t, vām devi sarasvat, y | ávā vājeṣu vājini | rádā pūṣéva naḥ sanīm* || 7. *utá syā naḥ sárasvatī | ghorā hiraṇyavartaniḥ | vṛtraghnī vaṣṭi suṣtutīm* || 8. *yásyā anantó áhrutas | tveṣás carīṣṇúr arṇavāḥ | ámaś cárati róruvat* || 9. *sā no víśvā áti dvīṣaḥ | svásṛr anyā ṛtāvarī | átann áheva sūr, yaḥ* || 10. *utá naḥ priyā priyāsu | saptásvasā sújuṣṭā | sárasvatī stóm, yā bhūt* || 11. *āpaprūṣī pārthivān, y | urú rájo antárikṣam | sárasvatī nidás pātu* || 12. *triṣadhāsthā saptádhatuḥ | pāñca jātā vardháyanti | vāje-vāje háv, yā bhūt* || 13. *prá yā mahimná mahināsu cékite | dyumnébhir anyā apásam apástamā | rátha iva bṛhatī vibhvāne kṛtó- | „pastútyā cikiúṣā sárasvatī* || 14. *sárasvat, y abhí no neṣi vásyō | māpa spharīḥ páyasā mā na ā dhak | juṣásva naḥ sakh, yā veś, yā ca* |

mā tvāt kṣétrāṇi yāraṇāni ganma ||

1. 彼女は強力な、負債を取り立てる⁴⁾ Divodāsa⁵⁾ を、敬虔な Vadhryaśva に与えた⁶⁾、次々と「現れる⁷⁾」 Paṇi⁸⁾ から「旅路の」糧を奪い取った彼女は、それら（牛たち）は君への強力な贈り物である、Sarasvatī よ。2. 彼女は鼻息たちによって、蓮根を掘り起こす者（イノシシ）⁹⁾ のように破った、山々の背を強力な波たちによって、遠くに「ある」者達¹⁰⁾ を打ち殺す Sarasvatī を、助けのために、良い讃唱たちによって、我々は勝ち得ることを望みたい、思慮たちによって。3. Sarasvatī よ、君は神々を非難する者達を叩き潰せ、策略に富む（計算力を持つ）¹¹⁾ あらゆる Bṛsaya¹²⁾ の子孫を。君は一族の者達のために河床たちを見つけ出した。且つまた彼らに毒を流した、勝利する「力」に富む女よ。4. 女神 Sarasvatī は我々を、勝利する力（戦車競争）たちによって、勝利する「力」に富む女は、思慮たちの援助者は、助け進めよ。5. 君に、女神 Sarasvatī よ、戦利品が置き定められた（懸賞がかけられた）時に、話しかける者があれば、Vṛtra を凌ぐ時に Indra に、のように、6. 君は、女神 Sarasvatī よ、（戦車）競争たちにおいて「その者を」助けよ、勝ち馬（f.）よ。Pūṣan¹³⁾ が、のように、我々に勝利「への道を」を拓け（開削せよ）。7. そして、例の恐ろしい、黄金の轍を持つ¹⁴⁾、障碍を打ち壊す Sarasvatī は、我々の良き讃えを望む、8. その、終わりのない、ふらつくことのない、激しい、動き巡る、波打つその攻撃（押し寄せ）が、「繰り返し」叫びながら進む「Sarasvatī は」。9. かくて、我々を、あらゆる敵意たちを越えて、他の姉妹（河川）達を「越えて」、天理に従う彼女は展げたのだ¹⁵⁾。太陽が日々を、のように¹⁶⁾。10. そして、好ましい女達の中で好ましい、七人姉妹の¹⁷⁾、大いに好まれる Sarasvatī は、我々に讃えられるべき者である¹⁸⁾。11. 大地に属する「場所」たちを、幅広い空間を、中空を彼女は満たした。Sarasvatī は「我々を」非難から守れ。12. 三つの居場所を持つ、七つの部分からなる「彼女は」、五つの子孫（種族）達¹⁹⁾ を増大させつつ、競争のたびに呼びかけられるべき者である。13. 偉大さによって、偉大な「河川」たちの中で、「常に」認識される²⁰⁾ 彼女は、天の輝きたちによって他の「河川たち」を「凌ぎ」、巧みな者達の中で最も巧みな彼女は、戦車がのように、背の高い、卓越した「者」のために²¹⁾ 作られた「彼女」は、気付いている者によって讃えかけられるべき者である、Sarasvatī は²²⁾。14. Sarasvatī よ、君は我々をより良き状態／ことへと導け。蹴り飛ばすな（ミルクを零すな）。ミルクに関して我々を不足させるな。我々との同盟関係たちと、部族社会たちを君は喜び迎えよ。君から「離れた」余所の定住地（住む場所）たち²³⁾ へと我々が行くことのないように²⁴⁾。

1) 厳密には VII 95 と 96 は, Sarasvatī と Sarasvant の二者捧げられている. Sarasvatī の男性形の対応神格 Sarasvant は, I 164, 52, VII 95, 3 (名は言及はされない), VII 96, 4-6, X 66, 5 に登場する. 2) Sārasvatasattra. Sarasvatī 川は天界へと続く聖なる河川とされ, その河岸部を遡上する形で執り行われる. 成果としての牛の数が一定数増大した時点で終了となる. Sarasvatī 川付近に住む他部族の牛を狙った往時の略奪行の存在が背後にあることが指摘されている. Cf. KRICK, 1982, 496ff. 3) 詩人: Bharadvāja, 神格: Sarasvatī, 韻律: 1-3 jagatī, 4-12 gāyatrī, 13 jagatī, 14 triṣṭubh. 4) Cf. GOTÔ, 1987 133. 5) 「天の奴隷/使用人」の意. Cf. MAYRHOFFER, 2003, 44. Sudās の父 (または祖父) とされる人物. Cf. MACDONELL/KIETH, 1912, 363f. 6) GELDNER III 245 は「息子として与えた」と解釈. GRASSMANN 587 'dā 4) eine Person [A.] einer andern [D.] als Sohn, Beschützer, Gatten oder Gattin geben'. 「勇者として与えた」とも解釈できるため, 両者が祭官・武人の関係であった可能性も考えられる. 7) KLINGENSCHMITT "Altindisch śaśvat-" 1975, 67-78 が明らかにした śaśvant- の「連続する, 途切れのない列, 組を構成する」という基本的語義により, 正しい解釈が可能となる. 具体的には「次々と眼前に現れる Paṇi を順次」という意味. 詩人達の一団が移動の過程で出会った素性の知れない諸々の異部族を「Paṇi」と総称していた可能性が考えられる. 8) アーリアに属さない裕福な一部族の名. Vala 神話により広く知られる. Cf. GOTÔ RV, 2007, 840. 9) Cf. HOFFMANN Aufsätze p.387. 10) pārāvata- 「あちら側, 埒外に住む者達」 < parāvát- 「あちら側, 遠い土地, 行ったっきりの場所, 最果ての土地」. ここでは Sarasvatī 川付近に住む敵対部族を指すと考えられるが, PB IX 4, 11 では河川付近の住民として語られるため「川向こうの人々」を意味している可能性もある. また parāvát- は「天界ではない死者が行き着く場所, 人間の世界とは別の異界」を特に意味することがあり (cf. BODEWITZ "Distance and Death in the Veda", 2000, 103-117), さらに AV X 10, 3 では, 天地の間の水の循環に関する議論の中で, 上下する水流の道筋を表す語としてこの語が pravát- と対で用いられている (Cf. SAKAMOTO-GOTÔ "Das Jenseits und iṣṭā-pūrtá-", 2000, 480). 11) māyín- < māvā-. māvā- は動詞語根 mā 「計る」から作られた抽象名詞で, 本来は「計算能力」を意味し, 後になって「magic, trick, 幻」の意を強める (cf. GOTÔ RV, 2007, 838). ここでは「Bṛsaya の子孫」の信用のおけない性格を言うものであろうが, 逆に彼らの先進的文化を表しているとも解釈できる. 12) RV では当箇所と I 93, 4 に登場. b という特殊な音と, r に後続するにもかかわらず s の音があることから (ruki の法則により ṣ が期待される), インド・アーリア語起源の名ではないことは確実である. 13) Pūṣan は家畜の群れを守る神で, 山羊が牽く戦車に乗り, 羊の毛を編み出すとされる (cf. OLDENBERG, 1923, 73, HILLEBRANDT, 1929², II 326ff, MACDONELL, 1898, 35ff.). ギリシア側の対応神格が牧羊神 Πάν (Pan, パーン) で, OETTINGER "Die Götter Pūṣan, Pan und das Possessivsuffix *-h₃en" Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik, 2000, 393-400 は両者が同一の印欧祖語に遡ることを明らかにした. Pūṣan と Sarasvatī はヴェーダ文献で度々並列して語られるが, 用例の多くが神名の羅列という形で伝承されているため, 両者の関連性は把握し難い. HILLEBRANDT はブラーフマナで Sarasvatī が雌羊と関連付けられている記述を紹介し, ガンダーラ地方で継承されている羊の飼育文化の

存在と合わせて、羊や山羊によって特色付けられる Pūṣan との関連の根拠の一端を見出している。14) 流れたあとに黄金が残るという意味。この表現からは雨期の氾濫の後にもたらされる肥沃な大地の姿が連想される。15) *ḍti-tan* aor. 3, sg. act. 機能は「確認」。当讃歌中、唯一定動詞が aor. 16) GELDNER II p.163 は当箇所と RV I 40, 7cd に、インド・アーリア人拡散の痕跡を認めている。I 40, 7cd. *prá-pra dās_uvān past_iyābhīr asthitā-¹ antarvāvat kṣāyam dadhe* || 「[神々に] 捧げる者（祭主）は、河川（居住地？）たちとともに、前（東）へ前（東）へと進んだのだ。内側に向かって、自らの居住地を彼は定めた」。17) Sarasvatī と並び称される他の河川・支流があったことを言うものであろう。7 という数字と河川からは、RV で度々言及される「七河川 (*saptá síndhavaḥ*)」が想起される。河川名が多数登場する X 75 では 18 の河川名が言及される。それらの列举及び現在の河川との同定（一部）については WITZEL RV, 2007, 432 を参照。18) *bhūt* (*bhū* aor.inj.) は *asti* の inj. の価値、即ち *asti* が「今たまたまそうである」ことをも意味しうることを避けた、「超時間的表現」であると考えられる。ただし、「～となる」とも解釈可 (cf. HOFFMANN Injunktiv, 1967, 135 及び 140)。さらに 214 「結果の確認」も参照。19) RV 以降数々の文献に散見される「五部族」という概念に相当するものであろう。「五部族」について SCHLERATH, 1960, 28ff. は、「中央」に位置する自らの部族と、その「四方」に位置するその他の諸部族を意味し、それらの五者を総合して「地上の全ての部族、全人類」を指すと解釈する。他方、RV I 108, 8 で並列して語られる Anu, Druhyu, Yadu, Turvaśa, Pūru のアーリアの五部族が具体的にそれに該当するという見解もある (ZIMMER, 1879, 119ff. 等)。WITZEL (RV, 2007, 434-436 他) は Anu 以下の五者が、数ある王族階級の中で事実上の「五部族」として中心的役割を担っていたと指摘している。当箇所では、先行する文脈で非アーリアと目される異部族との戦いの様子が語られ、さらに特定のアーリア人部族名が語られていないため、「全ての味方の部族達」程の意味で用いられていると解釈するのが妥当であろう。20) つまり「目立つ」という意味。Cf. GOTÔ, 1987, 138f. 21) あるいは「卓越へと」。高い技術力を持つ者達として描かれる Ṛbhu 三神の第二神 Vibhvan と解されることもある (cf. GRASSMANN 1288, WACKERNAGEL/DEBRUNNER II-2 176, SCARLATA, 1999, 365-367)。22) 工作や技術者の存在の示唆が見受けられる。印欧語族やアーリア人が手工業者として描かれることは稀で、彼らは基本的に自身では技術力を保持せず、必要に応じて他者から技術製品を調達していたと考えられている (cf. GOTÔ RV, 2007, 849 等)。ここではそのような技術を詩人達に供給するような（先住）部族が、多数 Sarasvatī 河岸部で生活していたことを表している可能性がある。23) 「余所の定住地たち」とは Sarasvatī 川付近以外の諸々の定住地を包括的に指し、Sarasvatī 川近辺こそが本来の定住地であることを強調していったものであろう。24) Cf. HOFFMANN, 1967, 48. 他の土地への移動を余儀なくされる事態が生じることを *mā* + Inj. によって禁止しており、この土地に対する詩人の強い思い入れが感じ取れる。

〈キーワード〉 Rgveda, RV VI 61, Sarasvatī, Ghaggar 川, Hakra 川

(東北大学大学院)